英知通信

発行
英知大学
兵庫県尼崎市若王寺
2－18－1（〒661）
℡（06）491－5083
編集
英知大学広報室

三浦朱門先生特別講演特集号

作家三浦朱門先生
特別講演
「ホンネとタテマエ」
主催　英知大学キリスト教文化研究所

教養と文化

「ホンネ」と「タテマエ」というのはそれ程、難しい問題ではありません。誰もが感じている事ではないかと思います。ヨーロッパ系の言葉では「文化」というのと「教養」というのは大体において同じ単語で表現されます。文化も教養もヨーロッパ系の言葉では同じですが、その根源を考えてみれば当りまえの事です。

文化とか、教養とかというのはどういう事かと言うと、一人ひとりの持っている価値観、何をもって良しとするかというのを、個人の場合でとらえると教養となり、社会の次元でとらえると文化となろうかと思います。

もう少し具体的に言いますと、今ここに三〇万円のお金がある。或いは三日間の暇がある。そういう時は何をするであろうか、三〇万円のお金を使う。或いは三日間の時間を使うという時に、一人ひとりの場合で言うと、その人が一番求めているもの、自分はこの際、是非やりたいと思っている事をやるにちがいない。この一人ひとりがやっている事を集めて、平均的なものをとる。関西では関西風の選び方がある。そうすると関西の文化となる。もし日本全体の平均的なものとしてとるならば、日本文化、それと同じような意味でアメリカ文化、或いはヨーロッパ文化とか、中国文化というような事が言えるかと思います。一番最初に戻り、今三〇万円あったら何をするだろうか、三日間の暇があったら何をするだろうか、という事は考えてみると、色々の事があり得る訳です。

毎日忙しく働いている人は、三日間暇があると、ぐうぐう昼寝していよう。そして眼があいた時、テレビを見ていよう、と言うかも知れない。或いは若い男だったら女性のおる所にいって、酒を飲みに行こうとするかも分からない。或いは三日間、三〇万円のお金があったら、小さい旅行、かなりぜいたくな旅行が出来ると言って、温泉場に行って、温泉につかったり、山を歩いたりする人もいるかも知れません。或いは前々から欲しいと思っていたカメラを買って写す人もいるでしょう。とに角三〇万円のお金、三日間の暇はその使い方によっては色々な使い方があると思う。

色々な使い方は一人ひとりの価値観というか、一人ひとりの人が何をもって良しとするか、何をもって貴しとするか、という事の反映であろうかと思います。そしてこれが社会全体になると、その社会がどういう事を望んでいるか、何を願っているか、これは平均値というのは大変難しいが、それでもなお社会における違いを見つける事は不可能ではありません。

例えば私達の殆んどが絶対しないであろうという事で申し上げますと、何年前にインドネシアの街頭に行った事がありました。田舎の村を歩いていてスコールが来て、仕様がないから、その辺の民家の軒先に雨宿りしていて、そこの娘さんが花を集めてきて、それを糸で花輪のようなものを作って「何をするんだ」と聞きますと、これを先祖のお墓なのか、位はいなのか、よく分からないが、要するにそれを先祖にお供えするという。

今頃こういう事をする人は日本の女の子には先ずいないと思いますが、或る時間の使い方の中に花を取りに行って、それを糸で連ねて、先祖のお墓だか位はいだかにささげるという時間の使い方をする人も現実には存在する訳です。それから勿論、ドライブするという人もあります。つまりアメリカの文化とか、日本の文化とか、色々あり得る訳ですが、その中で一寸頑張った言い方をする場合もあります。

例えば三日間暇があったらどうするかと言えば、学生なら図書館に行って勉強するというのは、一寸突っ張った言い方だと思います。ほんとうはそんな事しないで、もっとのらくらと遊んでいたいとか、或いは一日中、パチンコをしていたいという気持ちはあっても、一寸頑張って、つっぱって格好よく言おうとする場合と、格好よさを投げ打って自分の最も低い要求に答えようとする場合との両方があると思う。その格好よい言い方をする場合を「建前」と言い、もっと手前の低い自分のほんとうの要求、生の欲望を満たそうとする場合を「本音」と言う事にします。

建前とは、本音とは

建前と本音はどんな人にもある。日本の昔では、義理人情という事を言ったけれども、義理というのは人間であるが故に、社会に生きている限り、そうしなければならない事です。落語とか高座を読みますと「そんな事ではお天道（と）様に申訳ない」というような事を言います。或いは商人である以上、のれんに傷のつくような事はしてはいかんのだ。どうしても商人であるが故にこういう事をせねばならぬ。私は今日始めてこの町に来て、近松門左衛門と関係のある事を知ったのです。近松のドラマの根源というのは、本音と建前の相克にあります。建前としては、こうしなければいけない。

しかし本音としてはどうしてもこういう事をしたい。そのどちらを生かすか、この間の妥協点はないか、というと封建社会というと、その建前をくずすともう存在が許されないから、形ばかりの建前を残しておかねばならぬ。それができないとすると、死ぬより仕様がない。そういうような形で近松の作品は日本の封建性を批判したものだと言えない事はない訳だが、とにかく封建社会というとその建前をくずすと、もう存在が許されないから、形ばかりの建前を残しておかねばならない。それが出来ないとすると、死ぬより仕様がない。そういうような形で近松の作品は日本の封建性を批判したものだと言えない事はない訳だが、とにかく義理人情と言うのも一種の本音と建前だろうと思います。

本音と建前の乖離（かい）

本音と建前というのは日本だけではありません。どんな所にもあります。

例えばキリスト教国で言うと、或いはイスラム圏で言うと、或る事をしなければならない教会とか、宗教のおきてを守るのは建前です。しかし、それと正反対に自分の正味の欲

望というものも、またあります。

例えばサウジアラビアとかリビアという国はイスラム圏でも戒律の非常に厳しい所で、お酒を持ち込む事が出来ない。勿論、お酒を絶対に飲む事が出来ない。それならばサウジアラビアの人たちは一生酒を飲まないかと言うとそうではなく、同じサウジアラビア圏でも、すぐ隣に首長国連邦がありますが、そこは戒律がずっと緩やかで、そこに行って彼等は酒を飲んで、どんちゃん騒ぎする。そして、自分の国であるサウジアラビアに帰ってくる。丁度東京のサラリーマンが昼間はちゃんと真面目に働いていて、夜になるとバーに行って酒を飲むのと同じように、サウジアラビアでは戒律に従って厳しい生活をしていて、遊びたくなったら、首長国連邦に行って酒を飲んだりなんかする。彼等の中にも本音と建前の使い分けがある。

それから大日本帝国というのは無茶な事をした。マレイ半島等に行って、イスラム圏の人たちが豚肉を食わないと言って、大変劣った野蛮な事だと勝手に思い、イスラム教徒の人たちに豚肉を食べさせた。イスラム教徒に言わせると、銃剣を突き付けられたから仕方なしに豚肉を食べた。だが、その中の或る人は言った。「おれはもう一度日本兵の銃剣を突き付けられてみたい」と言った。つまり豚肉を食べてはいけないと言うのは戒律なのだが、しかしその本音の中にうまかったという記憶がある。つまりそこに本音と建前の乖離があります。

本音と建前の伝統的なもの、外来的なもの

日本の場合、本音と建前について今日問題になるのは何かと言うと、私たちの文化と教養の中に二通りのものがある。それは今から一二〇年ぐらい前から始まりました。ヨーロッパ的な（アメリカもふくめて）価値観というのが一つあり、それに対して日本の伝統的な価値観というものがある。この二つの中にそれぞれ本音と建前が有り得る訳です。

けれども本音と建前の伝統的なものと外来的なものとに分けて考えたいと思います。

例えば、今から一二〇年ぐらい前、近代化になる時に、日本の伝統的な歌というものを学校でも、軍隊でも止めてしまった。何故止めてしまったかと言うと、十九世紀までの軍隊というのは弱いと言うか、兵隊は厳重に監督していないとすぐ逃げてしまうという事があった。きちんと二列横隊に並べたり、或いは真四角に並べて号令一下足並揃えて進んで行った。号令をかけると前の人は坐った姿勢になり、後の列は立った姿勢になる。命令一下一斉に鉄砲を打つ。それからまた一、二、三と進んで射撃をする。というような軍隊の動かし方をする。

日本も当然、それに習った訳だが、その時に軍隊の行動を支配するために必要なのが音楽であった。太鼓と笛であった。最初は関西の部隊が江戸に攻め上る頃は、伝統的な太鼓と笛を使ったが、あれでは本物でないと言ってヨーロッパの太鼓と笛を使う。そうするとそういうものに慣れなければならないという事で、軍隊では西洋風の音を入れ、西洋風の発声を入れます。そして日本の小学校の音楽も西洋風の発声で歌を歌わせる。ところが西洋風の発声で歌を歌えると言っても、私たちの中にそういう伝統があまりない。だからどうにも西洋風の声の出し方になれない。

皆さんがもしイタリアに行かれると、すぐ気がつくと思うが、イタリアでは物売りの声の発声がオペラの声の出し方と同じです。また教会の神父様のごミサの立て方の声がオペラの声の出し方と同じです。何故かと言うと、よく分からないが、例えばヨーロッパの気候というのは日本に比べてずっと乾いている時間が多い。そして石造りの教会で部屋が沢山あったりすると、大きな声を出すと不思議な反響をする訳です。非常に強いエコーの中で神父さんはミサをあげなければならない。そういう時に自分のエコーに合せて、声を上げていくとするならば、やはり古典的な意味で和声、ハーモニーというものが好ましいと言うか、それが自分の声のエコーに対してうまく調和する。矛盾なくお互いに殺し合う事なく、教会の中に広がっていく。つまり声が通り易い。

歌を歌う人たちも男の声と女の声でこの領域が違う。その場合、西洋の和声で歌った方が、男の声と女の声がお互いにぶつかり合う事なく、或る程度の倍数をもって進んで行く。音波の振動数が一定の倍数で広がっていくから、お互いにぶつかり合う事が比較的少ない。その結果、和声が出来、乾いた空気或いは石の壁の中で声を出す。その事のために彼等の独特の発声法が出来たと思います。

ですからイタリアのベルナントルの発声法とドイツのリーゾノの発声法とはもう違います。それに比べると日本の家というのは下が畳ですし、そして周囲は障子とか、ふすまとか、壁とかで、全部音をよく吸い取るもの、音のエコーが出にくいもので、天井は板ですから比較的エコーは出やすいが、それでも真平でない、継ぎはぎだらけのものですから、西洋の天井に比べるとエコーの出にくい、反響の出にくいものです。しかも湿度が高い、こういう所で声を出すにはのどをつめた、いわゆる日本伝統的な歌の歌い方、声の出し方というのが自然だったに違いありません。そのような自然的な建築的な要素を無視して、明治の始めに私たちの先輩たちは、音楽については西洋風のものを出し、つくり上げたのです。

私たちが西洋風の声の出し方に慣れたかと言うと、あまり慣れなかった。そして、一生懸命西洋音楽を普及させようとしたのですが、確かに西洋音楽のファンは増え、楽譜もある程度理解されたと思う。けれども、西洋音楽が日本の伝統音楽を完全に破壊しただろうかというと、そうではなくて、どうしても昔ながらの発声法或いは昔の伝統的な音階というものは消えなかった。

例えば軍隊では表向きには西洋の音楽のルールに従った軍歌というものをつくる。しかし、兵隊たちはそれとは別に自分たちの間の民謡のような兵隊の歌をつくる。両方のものが平行して存在している。兵隊たちはいざという時に、或いは行軍をする時に、皆で歌う時に、西洋風の軍歌を歌う。しかし、自分たちの仲間だけになった時、或いはうつむいて自分の被服などを手入れする時に、口ずさむのはそういう軍歌でなく、自分たちの兵隊のつくった日本的な伝統の歌になります。

この両方の歌の違いがはっきりするのは何かと言うと、建前と言うか、自分のつくった胸を張って、或いはこういうものを歌っていれば間違いないと言う形の歌の場合はヨーロッパ語か漢語、殊に漢語が多い。それに対して自分たちの本音を歌っている歌は奈良時代以来あまり変っていない。達的な日本の歌が多い。

例えばその旧制高校の寮歌とか、軍歌とかを見ると、あれは耳で聞いたのでは何を言っているのか全然分からない。漢字ばかりだ。目で見れば、そして字引を引けばそういう意味かという事が分かる。しかし、あれは耳で聞いては分からないと思う。つまりあれは本音と建前に分けますと、建前の領域の歌を歌う場合には、詩をつくる場合には確かにあのような言葉はいい。だけれど自分の心の中にある、人にはあまり公にしたくない、或いは公にすると笑われるかも知れない、少なくとも酒に酔ったという口実以外では、人前に披露出来ない、そういう気持ちを表現するものとしては、古い伝統的な言葉に、いわゆる大和言葉を使う。この伝統は今でも消えてはいません。

ニューミュージックの中で革命の歌なんていうのは、まだ漢語が多いです。そうでなくて自分たちの素直な心を歌った歌になりますと、断然大和言葉が多くなる。耳で聞いてごく分かりやすい、ごく普通の単語で歌われています。そしてよく考えますと、ニューミュージックというのは圧倒的に短調が多いのですし、基本的にヨーロッパの音楽のはやしを取っているけれど、その累進縁関係はヨーロッパの歌よりも、むしろ日本の民謡にあるかも知れない。そのような意味で演歌というのは、日本の伝統的な音楽とそして我々が一生懸命学ぼうとした西洋の音楽との混血児ではないかという気がいたします。

二つの文化と教養

私たちの文化・教養というものを考えた場合に、はっきり二つの文化、教養がある。一つは背骨を伸ばして、そして最もらしい顔をして言う場合の文化であり、教養であり、一

つは浴衣掛けで、或いは夏暑い時ならパンツ一枚でうちわでバタバタやりながら、おれはこの瞬間どうしようか、酒を飲もうか、或いは友達と一緒におしゃべりしようか、というような時とは違うけれども、本音の方の文化とか教養というのは、どうも日本的なもの、伝統的なもの、或いは自分が生活の中で自然に身につけて来たもの、それに基盤をおくものが多い。それに対して人に褒められようとする者、或いはまともな文化教養に属するものというのは、どちらかと言うと外来文化或いは我々が、それに意識して学び、追いつこうとしたものが多い。

そして日本の評論家と言われる人たちも、或いは日本のインテリと言われる人たちも「日本と言うのは何時までたってもヨーロッパと同じにならないというのは、日本の伝達的なもの、悪いものを何時までも残しているからだ。フランスではこうなんだ、アメリカではこうなんだ、イギリスではこうなんだ、ドイツではこうなんだ、しかるに日本ではこういう状態である。だから駄目なんだ。一日も早く我々はフランスやイギリスやアメリカやドイツと同じようにならなければならない」という事を過去百年間言い続けて来た。

そして、私たちも長い間我々が何時までも駄目なのは、アメリカやイギリスやフランスと同じになれないからだ。一生懸命頑張って時間があったら、あれをしよう、これを身につけようと思って、けなげにもやって来た訳です。ところが今日までやって来て、ここで一つ考え直さねばならない事が出来た。それは何かと言うと、我々は一生懸命ヨーロッパ或いはアメリカに習おうとしたのですが、それがほんとうに意味のある事であろうか。こういう重大な疑問が一つ出てきた。

例えば、その工業製品で言いますと、長い間私たちはドイツで出来ているような鉄とか、アメリカのような自動車とか、英国のような鉄道の組織とか、英国のような海軍とか、そういうようなものを目標にして、それとそっくり同じようなものを造ればよかったのです。アメリカのような自動車を日本の工場が生産するという事は長い間のエンジニアの夢であった。ところが近頃では色々な条件、限定はあるけれど、日本の自動車もアメリカの自動車とそう見劣りしなくなった。それと同時に場合によっては、日本の自動車の方がアメリカの自動車より優れているかも知れぬと思われるような物もないではなくなってきた。

それならば我々はアメリカのような自動車を造る事に成功した場合、それは我々がアメリカ風のやり方を完全に身に付けたからであろうか、それは必ずしもそうではなくて、例えばトヨタ自動車の独自の方式で看板方式とかいう生産方法があって、そのために非常に能率的な生産が行われるという。或いは元来はアメリカの経営学から来たに違いない品質管理というのが日本には入ってくると、全く異質な日本的な品管管理システムになり、そしてそれが日本の工業生産品の質の向上に役立つとすると、日本の工業生産品が世界の一流品と肩を並べるようになったのは、私たちがアメリカのビーエムのようなやり方をほんとうにマスターしたからでなくて、日本がフィリップスとかのような電気工業のやり方を完全にマスターしたからではなくて、むしろ我々が生産のシステムの中に日本的なものを生かす事が出来たからである。

日本伝統文化と西洋文化

つまり長い間、日本的なもの、日本の伝統的なものというのは劣っているものとしか教えられなかった。或いは、そのようなものとしか扱われなかった。しかし、何かの形で私たちの中に残っている日本的なもの、日本文化といっても、日本的教養といっても同じ事ですが、それがヨーロッパ的なものの中に、うまく矛盾なく取り入れる事に成功した場合に、これは立派に力になって行く。つまり、ヨーロッパに学ぶという事は、ヨーロッパそのものになる事とは限らないという事が発見の一つだと思う。

それから先ず、音楽というと確かに小沢征爾とかいう優れた日本の音楽家がいる。指揮者としては小沢征爾がいるでしょうし、風見 透というような作曲家もいると思う。或いは近頃、パリやビーンなどの音楽コンクールで、毎年のように日本の演奏家が一番になっているという事を考えますと、日本の西洋音楽の輸入とか、音楽の学習というのは確かに大きな成果を挙げている。しかしそれならば日本の音楽つまり日本の西洋風な音楽を学んだ成果が西洋音楽の中にはいっているか、例えばロシアの作曲家が、或いはドイツの作曲家が、フランスの作曲家がその国を越えて、多くの国々で演奏されているけれど、そのような事が日本でもあるだろうかという事を考えると、確かに十九世紀からの国民主義音楽というのはヨーロッパ音楽の枠を広げて、そしてロシアとかハンガリーとか、ポーランドとかの音楽がヨーロッパの音楽の中にはいっていった事がある。しかし、そのような意味で日本の音楽が、日本が学んだ西洋音楽がヨーロッパ音楽の中に入っていかというと、必ずしもそうは言えない。簡単に言うと、日本人の作った交響楽が世界のあちらこちらの土地で演奏されているかというと、そういう事はない。

しかし、皆さん方は東南アジア、東北アジアつまり韓国とか、台湾とか、或いはフィリピン、タイ、シンガポール、マレーシア、それ等の国へ行かれてタクシーに乗って行く時、タクシーで音楽をかけていると「あれは聞いた事がある。あれは日本の歌ではないか」という機会が多いと思う。極端な事を言うと、韓国は別ですが、東南アジアで流行している歌の三分の一ぐらいは日本製でないかと思われます。これは日本が積極的に輸出したものではない。私たちが考える歌謡曲というのは、先程一寸言ったように、西洋の古典的、正統的な音楽と日本の伝統的音楽の間に生れた私生児のような、従ってまともなインテリはあまり相手にしないような音楽である。そういう音楽が西洋でもない、日本でもないという事のために、かえって普遍性を持って東南アジア、東北アジアに愛好されている。

今、韓国は色々な形で日本の文化を意識的に輸入しまいとしている。その理由は理解出来るけれども、もしその制限が解けると圧倒的な勢いで日本の色々な芸能が韓国に入っていくだろうと思う。同様に台湾にも入っていく可能性がある。音楽歌謡曲等は最も強い力だろうと思う。そうすると、先程の品質管理とか、日本の生産体制と同じような形で、私たちが確かに日本伝統音楽とは言い難い。かと言ってヨーロッパのものとは言い難い。そういうようなものが、どちらかと言うと私たちは長い間、恥じて来たもの、長い間くだらないものとして軽べつして来たもの、それが意外と国際的な流通性をもつ。国際規則普遍性をもつ。それならば、これは何だろうという事がある。つまり建前と本音と分けた場合、仮りに西洋文化、西洋の教養を建前として、日本の文化、日本の教養というものを本音とすると、本音を出すという事は私たちは恥じてきた。余程のプライベイトな打ち解けた環境でないと、自分の本音を打ち明ける事が出来ない。或いは本音の教養、或いは文化というものを楽しむ事が出来ない。少なくとも背広を着てネクタイをしめたところでは、建前の文化、建前の教養を私たちは教授して来た訳ですし、その中で文化を生産しようとしてきた訳です。しかしそれ程、我々の考える本音というものが劣っていないのではないかという反省が生れた。

関東の文化と関西の文化

もう一度今の事を整理すると、本音と建前と色々の事があるが、仮りに建前の文化を私たちが明治以降ヨーロッパの文化として受け取ってきたものとして、本音の文化を我々が切捨てようとした日本の文化と分けた場合、第一は建前の文化というものは、それ程優れているものだろうかという疑いが出てきた。むしろ本音がうまく介入する事によって、それはよりうまく行くのでないだろうか？　建前の文化に我々はいくら同化しても、我々は決してヨーロッパ人になれないと言ってよいのでないかと思う。

第二は本音の文化を流入したものというのは劣っているのではなくて、これは或いは新しい普遍的な意味を、新しい積極的な意味を、価値をもち得るからかも知れない。これは大変面白い事です。若し関西が東京に対して劣等感をもつとするなら

ば、東京というのは欧米の文化の、ヨーロッパ文化の輸入元であった。それに対して、ここには伝統的文化というものがある。むしろ伝統的文化があるために西洋の文化というものを素直に受取りにくい要素がある。そのために東京というのは建前の文化は進んでいる。そして関西と言うのは本音の文化については自信があるけれども、建前の文化になるとどうもうまく行かないのでないか。

例えば東京大学と京都大学を比べますと、東京大学はとにかくヨーロッパの最新の学説を輸入する大学である。だから卒業生はどんどん外国へ留学して、ドイツやフランスやイギリスに行って勉強して、その国の最新の学問を輸入して教える。それに対して京都大学というのは、それよりも自分独自の学問をつくる。つまり建前ではなくて、どちらかと言うと本音に近いような学問をつくる。そういう所に主眼点があったかと思います。旧制高校でいきますと、その差が一高と三高の差だと言ってよいと思います。

そのように東京風の大学、高等教育機関、そして関西風の高等教育機関が出来て百年ぐらいたちますと、別にノーベル賞が学問の水準を計る唯一の物指とは言えませんけれど、仮りにそれを一つの物指とすると、ノーベル賞をもらう学者というのは圧倒的に関西系の高等教育機関で学んだ人が多い。それに比べると東京は厳密な意味で東京系の人はいない。たとえ東京大学の卒業生であっても、その教養、その人の価値観を形成する課程においては絶対関西だ。その意味で、ノーベル平和賞をもらった佐藤さんという政治家がいるけど、あの人は山口県の人ですが、ノーベル平和賞というのはノーベル賞といっても学問と関係ありませんから、それを除きますと後のいわゆる学者としてノーベル賞をもらった人、文学者としてノーベル賞をもらった人は完全に関西人です。これは関西において教養の根幹がつくられた人です。そういう事を考えますと東京的教養或いは東京文化、建前の文化というのは、建前として身にそぐわない文化というのは所せん、これは借物なんじゃないか、それに対して関西風な、自分の本音に基づいた教養というものが、或いはほんとうの日本の誇るべきものかも知れないという考え方が出来るかと思います。

ヨーロッパ文化の変遷とルネッサンス

私は歴史というのは学生時代大変苦手で、殊に私が教育を受けたのは戦争中で、私の家には不思議な居候が沢山いて、この人たちが私に教えた歴史というのは戦争中のものと大変違って、今、中学・高校の歴史の教科書は左翼的に偏向していると言うけど、私が家庭で大人たちから習った歴史観というのは、それよりもずっとずっと左翼的に偏向していた教養でした。そういうふうな私でありますと、戦争中の日本の学校で歴史を習っていると馬鹿らしくて、とても付き合っていられないという事もあって、私は歴史で及第点を取った記憶がない。だから、私が歴史について言うと大変おかしい事になると思うが、それでもなお私は日本の西洋史学者というのは過去百年間、何をしていたのだろうかという気がします。何していたのだろうというのは、西洋史というのはヨーロッパ人が書きますとヨーロッパ人が歴史の中心になります。つまりヨーロッパというのはギリシアやローマの文明とキリスト教に代表されるヘブライズムというか、世界宗教文化というものの正統の後継者がヨーロッパであるという考えがある。そういう考え方はパリのルーブル博物館で一番人気のあるものは、例えばビーナスである。レオナルド・ダ・ビンチのモナリザである。ミロのビーナスは古代ギリシアのものであり、モナリザはルネッサンス、イタリアのものです。それが何故フランスにあるかというと、あるものを全部フランスに持って来る事によって、フランスこそはヨーロッパ文化の正統な後継者であるという事の証明のようなものだと思います。

例えば、日本でも南朝と北朝と分かれますけれども、どちらの天皇が本物かというと、三種の神器と言われていた鏡と剣と玉とを持っている方が本物の天皇だという事が言われるとすると、南朝・北朝に分かれた人たちは、やはり鏡と剣と玉を握ろうとする。それと同じような形で、フランスが自分たちがヨーロッパ文化の正統の本家であるという事の宣言のためには、確かにルーブルのようなものを作らなければならなかったという気がします。そのような正統を主張するための多くの間違いが数多くあるような気がする。

例えば、ルネッサンスという言い方がありますが、ルネッサンスというのは、よみがえりという事と、もう一度よみがえる事です。つまり一度歴史の舞台から退いていた文明の、文化の舞台から退いていたヨーロッパが再び文化に目覚めたという事です。これは地域として考えた場合には、確かにイタリアには古代文明のローマ帝国の所在地であった。それがローマ帝国が滅びてから長い間、権力のない状態になってきた。文化的に積極的でない時代、消極的な時代が続いた。そして、中世の終り頃になってイタリアが再び文化の中心として栄える時代がくる。だからイタリア半島そのものとして考えた場合に、確かにこれはルネッサンスであると言えると思う。しかし、ローマ文明を担った人たちとルネッサンスを担った人たちと同じ民族かというとこれは違う。

例えば、古代ギリシア文明を作ったいわゆる古代ギリシア人と現代のギリシア人と同じかと言うと、文字は大体似ているし言葉も似ているが、これは違う。例えて言うと、中国文明が何かのために滅び、次第次第に日本人が増えて来て、中国に入った日本人が何となく中国語めいた言葉をしゃべるようになって、そのうちに中国の古代文明が滅びた。しかるに完全に日本人的になってしまった新中国人が再び古代文明の復活を目指したといったような時に、これをルネッサンスと言えるかというとそうではなくて、これは新しい学習、新しく学んだ事ではないかと思う。どうしてあの時代にルネッサンスが起きたかという事を考えたいと思う。何故かと言うと、何故日本が今、新しい文化的局面に立っているかを考えるのに役立つからだと思う。

イタリアという国は長靴のような格好をしているが、そのために地中海に突出している。少なくともイスラム世界に突出している。十五世紀から十六世紀にかけてイスラム社会とキリスト教社会で非常に微妙な変化のあった所で、西の方つまりイベリア半島ではキリスト教勢力がどんどんイベリア世界を圧迫して、ジブラルタル海峡を超える傾向にある。それに対して東のオトマントルコは東ローマ帝国を滅ぼして、その一時期においてはウィーンの郊外にまで迫る。一方ではイスラム圏が盛んで、ヨーロッパを圧迫する。西の方にあってはキリスト教がイスラムを圧迫する。右側ではイスラムは北に上り、東の方ではイスラムは北に進攻し、西の方ではイスラムは南に退却するという形勢にあった。その丁度中心になったのはイタリア半島です。イタリアはその中心にあったために、キリスト教国でありながらイスラム圏とつながりがあったというよりも、或る時期、南シシリー島と南イタリアとがイスラム圏に占領されていた時代もあった事をふくめて、イタリアはヨーロッパの中では大変イスラム圏とのつながりの深い地域なのです。ですから彼等はイスラムと敵対すると同時に、手を握る事を知っていた。その代表的なのはベェネチアという町で（ベェネチアの町については塩見直実さんの本を是非読んで頂きたいと思う。）ほんとにあんな賢い人がどうしてイタリアのお医者さんと結婚してしまったかと思うけれど、ああいう日本人がイタリアに行って、イタリアの勉強をしている事はいい事かと思うけれども、ベェネチアという町は一面においてアデア海を隔てた向こうはイスラム圏ですから、一面においてイスラムと対抗しながら、一面において通商している。

最後にイスラム圏が弱くなった時に、スペインと連合してベェネチアはイスラムの海軍と戦い大勝利を収める。これをデパートの戦という。これを目途としてイスラムはビイチンのあたりからどんどん退却して今のトルコまで縮小していく。（それはずっと後の事ですが）ベェネチアはとにかくイスラムと接触する。イスラムの物を輸入する事によってもうけていた。これは今一寸たとえ話が成立しにくくて難しいが、社会主

義圏の中で自由主義圏が突出している国がある。例えば地理的に言うとチェコスロバキアですが、ああいう国があって、自由主義圏と対立している顔をしながら、自由主義圏の物をどんどん輸入するという事があり得たとする。それと同じような状況にあったのがベェネチアだろうと思う。そしてベェネチアはヨーロッパに、イタリア半島にイスラム圏のものを盛んに輸入する。そうすると初めて彼等はイタリア人は自分の回りにあるものは古代文明の名残であったのかと気がつく。

今、ローマの南の郊外に行くと古代ローマ皇帝の離宮の跡が残っている。しかし、いくら離宮の跡といっても大理石も何もなくて、汚ない煉瓦を積み上げたような物です。それをかつては立派な大理石の建物が沢山あったに違いないが、その大理石はどこにいったかと言うと、土地の人が全部壊して周りの町で自分の家を造ったり、教会を造ったりした訳です。だから中世のイタリア人というのは古代ローマを壊していったのですが、自分たちが壊していったローマ帝国の離宮というのは、実はこういうものであったのかという事が、ベネチアから輸入した文献を通して初めて知る訳です。つまり、自分たちが住んでいる所を再発見した事だと思う。或いはこの尼崎に新しく来た人たちは、この土地の伝統的な事は知らない。しかし或る時ふとした事から、そうかこの土地にこんな事があった、あの戦いはここで行われたのかというような事を知る。それと同じような形で、イタリアの人は自分たちの土地にあった昔の事を知った訳です。だから、これはルネッサンスでも何でもない。

彼等は輸入するのですが、次にこのイミテーションをつくる。これは日本と同じですね。始とはヨーロッパの物をつくる。次にそのイミテーションをつくる。そしてイタリアはイミテーションをアルプスの北に輸出する。日本はそのイミテーションを朝鮮半島や中国大陸に持っていく訳です。この場合、本物がヨーロッパやアメリカから直接来ると具合が悪いから、無理矢理に植民地という事にして、他のものを入れないようにして、日本で作ったものを朝鮮半島や中国大陸に押しつけた訳です。

イタリア半島の方はそんな事はありませんから、イミテーションをどんどん造ってアルプスの北に持っていく。その過程において、イタリアというものは本物のイタリア生地のものとイスラムに移入するものとの間に不思議な相互関係の働きが起きて、イタリア独自のものを造ってしまう。

例えば、ベネチアの港外にムラノという日本みたいな島があって、そこに硝子工場がある。イタリアに知り合いが旅行した人が、イタリアの土産として皮細工で金箔を押したようなケースとか、財布とかもらった人や買って来た人が多かろうと思うが、あんな物は硝子器具と同じで、元来イスラムの産業では、あれをイタリアで復製しているうちに、まるでイタリア産業のようになっている。それから輸出の文化というのがある。

ヨーロッパ文化とイスラム文化

ヨーロッパ文化とイスラム文化の二つのものがあると、その間をはっきりさせるために別の方法が必要になる。例えば中世までにキリストとか聖母をかく場合に、後光のようなものをかきさえすれば、大体のスタイルでキリスト或いは聖母マリアという事が分かる。その限りでは非常に簡単である。同時に聖母マリアというのは、人間としての最高の存在ですから、清らかで、美しく、やさしいですが、女性としてあまり美しく表現してしまうと困る。

例えば、聖母マリアに女を感じて性的な情熱を呼び起すような聖母マリアであっては困る。従って中世の聖母マリアというのは、よく言えば精神的、悪く言うと非肉感的な描写にならざるを得ない。それでも赤ん坊を抱いていたり、金色の後光があったりすると、これは聖母だという事が分かって来る。

東京付近の子供は富士山を描く時非常に簡単で、三角形の頭の切れたようなものを書いて、雪の線の印に山形のようなものを描き、上の部分を白く残し、下の部分を青く塗れば、これは富士山だというようになってしまう。そういう一種の類型的描写というのがある。ところが言葉で言うのはやさしいけれど、聖母マリアというのは、この上なく清らかで、やさしく神聖で、しかも美しい。その美しいという事を表現するためにどうしたらよいか、つまり違う文化の持主、イスラム圏の人たちに女の美しさを表現するのにどうすればよいか、これは今までのようにキリスト教徒のみに通用するような、パターン化した聖母マリアの表現では何ともならない女の美しさを説明しなければならない。その時にパターン化した聖母マリアの描写というのは、これは建前としての美しさです。それとは別に、それじゃ美しい女というのはどういう人と思うかと言うと、自分の体験を基にして美しい人を描いていかねばならない。

ラファエロという人は、レオナルド・ダ・ビンチやミケランジェロに比べると自分の芸術というものに対する理論的な認識が弱い感じがする。けれども聖体（カトリックで言うキリストの肉になったパン）の認識という絵がシスタジャベルにあるが、そのご聖体という実物のご聖体の中に実物を見ないと、あれがそうだと分かりにくいが、ほんとにリアルにかいたご聖体を中心にして、天と地が力学的に一点に集まって、ご聖体によって天の世界、神の世界とこの世が結ばれている。これを支えるものは、このご聖体なんだという大壁画があるが、それを見るとラファエロという人は神学的に愚かな人でも何でもなくて、彼なりの神学をもっていた人と思うが、例えばビレステンという、いま東ドイツになっている町にフィステナ、コンドレナという二mぐらいの絵がある。それは恐らくラファエロのかいた聖母子像の代表的なものだと思われる。

ホーリーであって神聖であって、しかも淫らな欲望を起させない。そういうものを一生懸命描いた。そのモデルは何かって言いますと、あのラファエロの描いたたくさんの絵の中で「緑色のベールをした女」というのと、「パン屋の女」って言いましょうか、オカリーナというのがありますけれども、二つの絵のモデルと、ドレスデンにある「システィーナのマドンナ」というのは、同じモデルであると思われます。よく見ますと、かすかに身の形が違っている、ここのところが、それ自体ふくらんで豊かだったりする違いがありますけれども、この「緑色のベールの女」と「パン屋の女」の絵と、ドレスデンの「システィーナのマドンナ」と、この三つのモデルは同じだろうと思います。「緑色のベールの女」というのは、まあ普通の服装をしていますけれども、「パン屋の女」というのは、これはセミヌードで、おまけに彼女は腕に腕輪をしており、字が書いてあり、それにはラファエロの名前が書いてある。つまりこれはラファエロは一生、その正式な結婚をしていないけれども、ラファエロがこれは自分の女であるという証拠に、そのような自分の名前を書いた腕輪をつけさせている。

今だって、まあこの頃の人は随分裸になって写真を写されるのが平気になったと言いますけれども、それでも、それにはかなり抵抗があるだろうと思います。ましてや今から四百年も前の人達が、裸になったモデルになるということに大変な抵抗があったに違いない。そういうことをしてくれるのは、余程親しい仲の女の人以外なかったと思います。したがって、この三人が同じモデルだったとするならば、ラファエロは自分の愛している女をまともな衣服を着た形で描き、あるいは人間の体の勉

強のために半分裸にして描き、そしてそれを基にして、そういうものを描いた。

つまり美しい女っていうものを描く時に、ラファエロの時代になるともうひとつの概念、中世的な観念、建前としての美しさでなくて、自分のいとしいと思う女、それを基にして美しい女のイメージをつくっている。

ルネッサンスのイタリア

ローマのパンテオンというのは、古代ローマの建築の遺跡がそのまま残っている場所です。けれども、そこへ行きますと、イタリアが統一されてから後のイタリアの皇帝達の墓と並んでラファエロの墓もある。偶然かどうか知りませんけれども、ラファエロの墓というのは、私が行くたびにかならず赤いばらが供えてある。ラファエロの愛していた女が今まで生きている訳ではないんで、ラファエロという人は、今でもローマの女に人気がある。なぜかって言うと、多分それはラファエロが自分の恋人を聖母にまで昇華した、荘厳化した、神聖なものにした、ということにあるのではないかという気がしまして、ローマに行くたびにラファエロの墓に行くことにしておりますけれども。つまり、ルネッサンスのイタリアというのは、イスラム圏とキリスト教圏という二つの文化圏の接点になっている。そのために美しい女というような観念的な表現、或いは、それまで長い間、中世の間ひとつの建前としての表現があった。パターン化した表現があった。それでは通用しなくなる時代であった。そのために本音を基にして、ひとつの形をつくっていった。それが芸術でいいますとルネッサンスでありましょうし、それがその精神がずっと後にまで、他の分野まで行きますと、それが実証主義的な学問になって行く。つまり、イスラム圏とキリスト教圏の接触、それが生んださまざまな混乱と、その解決策のひとつとして行われたのが建前を基にして、しかもその中に本音をいかにして表現していくかということ。

例えばルネッサンス期になりましても、それ以前のと同じように聖母マリアは赤ん坊を抱いている。しかし聖母マリアの描写、赤ん坊の描写が全然違ってくる。大枠においては、これは建前の形が依然として残っております。しかし具体的な描写になりますと、本音の部分が強く表れてくる。これがルネッサンスのイタリアというものだと思います。

日本の近代化

ルネッサンスのイタリアについて色々申し上げたのは、形こそ違え日本というのは、やはりそれと似たようなものにある。過去一二〇年たちましたけれども、近代化という形でヨーロッパの文化が私達のまわりに押しよせた。私達はそれを一生懸命取り入れまして学んだ。私達は多分、西洋文化を輸入したという意味におきまして大変な優等生であった。これは別に日本人が優秀であったからという風にとるというのは間違いであって、強大なアジア的な文明の外にあったという意味で、日本とヨーロッパとは共通した条件がありました。ですから歴史の発展の段階を考えても、ヨーロッパと日本は偶然ですけども並行的な現象がある。生物学の中でもそういう変異が並行して行われるということがあります。けれども、日本の歴史とヨーロッパの歴史の中に、ちょうどその進化論にみられるのと同じような並行現象があります。そういうこもあって、日本はヨーロッパというものを受け入れました時に、最初の四〇年でたちまちそのヨーロッパ風の戦争の仕方を覚える。そして中国に勝ち、ロシアに勝つ。ところがよく見ますと、その日本の、ロシアに勝った日本の帝国陸海軍というのは、西洋風のシステムの中に日本の伝統が入っていた訳です。日本の伝統的な武士の精神が入っていた。その部分を過大評価して日露戦争以後の日本は近代化をしなくなった。形の上での近代化はあるけれども実質的な近代化はなくなってしまった。

その墮落の結果、第二次大戦の敗北というか、あのような事になってしまった。私達はもう一度近代化をまねる訳です。そして明治の始めから日露戦争までと同じように約四〇年間。そうすると日本の帝国陸海軍がロシア軍に勝ったように、日本の工業生産物は、日本の経済力はヨーロッパに負けないような状態になった。つまり、これは第二の日露戦争の勝利だと思います。その中に、確かに私達はヨーロッパのシステムを学んだ。アメリカの生産様式とか、アメリカの経営学とか色んなものを学んだ。ところが成功してみると、成功した本当の理由というのはヨーロッパの技術システムもさることながら、日本的な要素が多いことに今再び気がついた訳です。

本音の文化

ここで我々の地の文化といいましょうか、本音の文化というものが、それほど否定するものではない、捨てたものではないということを先程から申し上げておりますけれども、これを、うっかりそのまま考えて日本のやり方がいいのだ。日本のやり方をこのまま世界的に押し広めていいのだ。日本は本音でやればいいのだ。日本風のやり方を世界中に押し広めればいいのだ。という事を考え始めると、日露戦争以降、一九四五年第二次大戦で負けるまでの日本というものをもう一度繰り返す事になると思います。

ところが問題はそうじゃなくて、本音と建前の相克の中に、例えばベネチアがある時にはイスラム圏と戦う十字軍の出発点となるにもかかわらず、大使をコンスタンティノープル、今のイスタンブールに置きまして、それを通して様々な形でイスラム圏と交渉して貿易を行っている。その敵であり、味方であり、恐るべき征服者となりうる。しかし同時に優れた文化を持っている。こういう相矛盾したイスラム圏とのイスラム体系の中に、ベネチアというのが非常に、眺めようによっては豊かなものになっている。ベネチアの影響を受けて、そばにあるボローニャという所には世界最古の、ヨーロッパ最古の大学ができる。或いはその近くのフィレンツェという所では新しい芸術が起る。この場合、芸術は決して金持ちの遊び道具ではなくて、アルプスの北へ持っていく場合の貴重な貿易金を造る一種の工場だと思った方がよろしいのですけれども、いわゆる芸術でなくて新しい産業なんだと理解して下さい。とにかくそういう新しい産業としての芸術が起る。「これはもうイスラム圏なんて必要ないのだ、我々のやり方でいいのだ、我々が地のままのイタリアをやればいいのだ」と思いはじめる頃からイタリアというのはどんどん滅びまして、今度はアルプス以北が栄えた。

日本は一二〇年の間に二度似た経験を繰り返している。一度目の経験の苦い失敗も知っているとするならば、そ、こまわりの歴史を考えるならば、私達はここで本音と建前という二重構造の文化の中で建前としての輸入文化、これは私達とても今でも圧迫を受けます。例えば私達が社交ダンスを習う。そうすると、習いたてはどうしてもみっともないから踊れない。上手になってから踊ろうと思う。ダンスでもそうです。ゴルフでも練習して上手になってからしようと思う。しかし日本古来のスポーツである相撲の場合に、練習して上手になってから相撲をとろうなんて誰も思わない。丸を書いて、はっけょいのこったをやれば、三つの子供でも相撲をやる。ゴルフだって、それが発生したイギリスのスコットランドではそうであったに違いない。誰もが適当な棒で玉を転がして穴に入れる遊びだった。だから、わざわざ習ったなんてものではない。

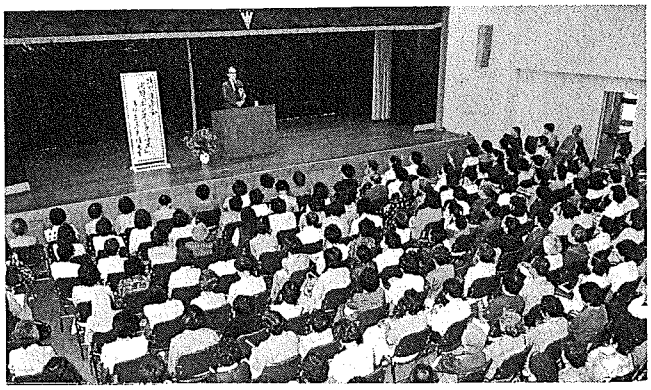
アメリカのアイオワという田舎町の大学に遊びに行っていた時、そこの大学院に世界各国から集まっていたグループがあった。そこへ行くとやはり始終パーティーがあって、日本から来た人は、僕は踊りが下手だからといってなかなか踊らない。たまたまそこにアフリカから人が来まして、「俺の郷里には俺の部下が十万人いる」ってなことを自慢する。皆、いやなやつだと思っていたんですけど、それが踊りはじめるや否や一番うまいんです。もちろんヨーロッパやアメリカの踊りではなくて、アメリカのジャズに合わせて自分達の国のステップをふんでいるにすぎないのだけども、それが圧倒的にうまい。圧倒的に美事なんです。これはつまり、日本の子供が相撲をとるような形で、そのアフリカから来た男は踊っているに違いない。私達がヨーロッパ風の踊りを踊ろうとするから、これは勉強しなきゃいかんと思うんです。

字が下手だっていうので字を書くのがいやだというのも、これは漢字というのは日本の本来の字ではないんです。ですから私達は一生懸命習う。しかし中国の中華料理屋の人というのは、彼らにしてみたら中国文字というのは生まれつきのものですから、習わない訳はないと思うのですけれども、ごく簡単に彼らはそれ以外字が書けませんから、饂飩（ワンタン）とパッパッと書くんですね。それなりに自信があるから、それなりに形がとれている。私達でいいますと、仮名を書く時には、外国で仮名を書く時には、あまりへどもどしないで書ける。中国人の前で漢字を書く時にはちょっと気がひけるけれども、日本にはどんな字があると、アイウエオを書くなんていうのはあまり抵抗感なく書ける。というのは、我々が仮名というのは我々の字なんで、相撲と同じように我々が書けなくて誰が書けるかというところがある。

鳳蘭さんという宝塚のスターがいましたけれども、あの人は漢字を書くと恐ろしく下手なんですね。私は字が下手だということについて大変自信があるんですけども、私よりはるかに下手なんです。にもかかわらず彼女は恐れることなく漢字を書く。中国文字を書く。ああやっぱりこの人、自分の国の字だと思って自信があるんだなと思う。

パブロ・ピカソという人は多分二十世紀後半を代表する偉大な造形芸術家だと思います。あの人が晩年に陶器をさかんに作りまして、陶器に非常に気楽に絵付けをしている。面白い陶器をたくさん作っていますけれども、その中のあるもので、漢字をまねしたようなものを書いているのがある。これはもう大変に下手なんですね。つまり、ピカソっていうのは偉大な芸術家だと思う。偉大な造形感覚のある人だと思う。その人が漢字を書くと、ここにいるほとんどの日本人より下手なんです。下手っていうのは何かっていうと、漢字っていうのは、それなりにひとつの全体としてのまとまりがなきゃいけない。まとまりがどうしてもないのですね。

どっかの新聞で、最近円高がなんとか、かんとかっていって、留学生が円高について非常に困っているという記事を連載していたけれども、その円高なんとかというのを留学生が書いている。その漢字を見るとやはり大変下手なんです。もっと言いますと、日本で横文字を書いたトラック、バスがたくさんあります。活字体ですと、これはもうひとつの基本があって、縦何センチ、横何センチていうふうな、一対二というような比率があるから、活字体ですとごまかしがきくのですけれども、筆記体で書いているのを見ると大変下手なんです。活字体に比べると断然下手なんです。なぜかと言うと、私達の中に横文字を書く伝統がないからだと思います。



建前としての文化

つまり、私達が建前としての文化、学んだ文化というのはいくらやってもこれは、そのものにはなりきれない。私達はどんなに一生懸命やっても、イタリア人のように国民全部がオペラのような発音をするということは望み得ない。長い間私達は、これを日本が駄目なんだから、日本人の努力が足らないからこうなんだと思っていた。しかし、そうではなくて、我々は歌を歌う時にイタリア人のように歌う必要はないのではないか。

自動車を造る時に、アメリカ人のように造る必要はないんではないか。日本独自のやり方がいいんだという意味では全然ないですね。そうではなくて長い間、一〇〇年間一生懸命にやってアメリカと同じになれない。イタリアと同じになれない。これは駄目だと思っていたんですけど、そうではなくて、そこにむしろ我々のオリジナリティー、独自性があるのではないか。この独自性はそのままでよろしい訳ではない。その中にこそ世界の人がまだ知らない、新しいエネルギー、新しい可能性の芽が潜んでいるのではないか。

例えば、関西はそんなことはありませんけれども、日本の多くの土地は東京文化圏と大阪文化圏に分かれますと、何とか銀座というのがあるかと思うと、大阪の心斎橋のような屋根のある割と狭い、人間が歩いて通る、車の通らない商店街、この心斎橋スタイルと銀座スタイルのどちらかのものがあって、そして大阪のような町づくり、或いは東京のような町づくりというのを全部真似している。ところが、いくらやっても地方都市は大阪にはならない、東京にはならない。それはやはり、我々の町が我々の県が遅れているからというふうに言っていたのですけど、そうではなくて、そんなに一〇〇年、二〇〇年の間、江戸文化、浪花文化に圧迫されながら、しかも、どうしても浪花文化或いは江戸文化に征服されざる部分というのがあるとするならば、それがむしろ、その土地の持って誇るべき財産なんじゃないか。そのものが価値があるというものではなくて、それを宣伝し、その中のよいものを基にして、建前としての大阪、或いは建前としての東京というものを反映させて宣伝することによって、そこに新しい偉大なものが出て来るのではないか。

別なもっと大きな場合で言いますと、日本がアメリカのようにならない。ヨーロッパのようにならないというのは、なれないのではなくて、なる必要がない。なれる部分はできるだけなった方がいいのですけれども、どうしてもなれない部分があったならば、それをよく分析致しまして、この中のどのような部分が、我々が一生懸命学ぼうとしたヨーロッパというものに、或いはアメリカというものに応用できるか、その中に組み込む事ができるかという事を考えて、そしてその中に私達の未来、或いは私達が世界の文明というものに貢献しうる可能性があるのではないか。

私は日本の歌謡曲というのを、それほど優れていると思っている訳ではありません。しかし、とにかくも日本の伝統的な音の感覚というものを、オタマジャクシにのせた。それだけでもう東南アジアにあれだけの普及力がある。或いは、むしろ日本の高級な音楽家達も、最近では日本の伝統的なものというのを意識して作曲するようになってきました。そうした時に日本の、もちろん生のものを持って行くのではない。生のものを持っていくのではないんですけれども、どうしてもヨーロッパ化せずにしようとして、しかもヨーロッパ化して残ったもの、それを本音の中の本音、或いは日本文化の根源的なものという風に考えると、根源的なものを洗練するという事によって、これは通俗音楽においても、或いは高級な音楽においても、普遍的なものをつくり上げることができるかも知れない。幸か不幸か、第二次大戦後、世界というのは二つの極があった。アメリカとソ連という二つの極があった。

自由主義文明と社会主義文明

自由主義というひとつの文明と、社会主義というひとつの文明、二つが対立していた。それが第二次大戦が終りまして四十数年、二十一世紀までに半世紀以上たつ訳です。その半世紀以上の中において、それらのものは決してひとつの原則によって動かされるものではないという事が分かっている。

例えば、同じ自由主義といってもアメリカとヨーロッパは違う。或いはアメリカと日本は違う。同じ社会、人権といっても、ソビエト、ロシアと中国とは違う。ソビエト、ロシアと東ヨーロッパ、もっと細かく言いますと、東ドイツ、ポーランド、ルーマニア、それぞれ特殊なものがある。そういう事が分かってきた。そうすると社会主義圏の中では中国的な社会主義というもの、マルクス主義という建前の中に中国独自のものを絶え

ずぶつける事によって、社会主義に新しいものをつけ加える事ができるかも知れない。同じような事が、ポーランドも或いは東ドイツもできるかも知れない。そうするためには、社会主義圏というのは建前があまりにも強いところであって、実際問題としては困難なところがあります。

自由主義圏というのは幸いなところ建前というのがあるようでいて、ないようでいて、あるのですけれども、しかしそれほど強制的なもんではない。それに建前に背くと社会から家庭から追い出される、追放されるというほど強い建前ではない。そのために私達は自分達のもっている建前でない本音というものを、絶えず建前とぶつけながら本音を洗練していくという事が可能であるかと思います。もっとも建前が弱いという事は、本音をぶつける事によって、これで通用するんだ、日本的なものをこのまま生で押し通して、それでかまわないんだという野郎時代、というか勝手な思い上がりをする恐れがあるのです。同時に社会主義圏のように建前が強いと本音を出そうにも、本音を出す事自体がはばかられて、結局、建前ばかりがいつまでものさばるという状態になると思います。

それぞれ二つのものを世界の中において問題点はあるのですけれども、しかし日本は幸か不幸か自由主義圏にある。とするならば、私達は今、自分達が尊大になるという事をできるだけ自分で戒めながら、自分達の中で長い間否定してきたもの、本音にあたるものを建前の中にぶつけていくということ。これは生産の技術においても、或いは学問の世界においても、政治のシステムにおいても、或いは私はカトリック教徒ですけれども、カトリック教徒ならカトリック教徒の中においても、私達の建前としてのヨーロッパから学んだカトリック、ヨーロッパから学んだビジネスのやり方、ヨーロッパから学んだ学問のやり方、それを建前として、それとは別の私達の本音としての信仰、本音としてのもろもろに対する考え方、本音としての人間関係というものを建前にぶつける事によって、私達が長い間否定してきたものの中に新しい芽を発見し、育て、立派な花を咲かせる。それが私達自身を豊かにするばかりでなくて、うまくすると私達の近隣の国々、多くの人々、或いは更にうまくいきますと世界に貢献する事が可能であるかも知れない。やはり、日本人一億二千万いる。おそらく、これは全地球の人口の二%か三%になるかと思う。これだけの二%或いは三%の人間が我々の仲間であるならば、やはり可能性として、世界文明の二%、三%を我々が担う資格があるし、義務がある。

そのような意味で私達は、良い意味で私達の本音というものを再発見する必要があるのではないか。或いは日本の地方というものは、中央とされる東京或いは長い間の伝統的な文化の中央とされてきた京阪神地区に対して、地方の本音というものをぶつけて、そしてより充実した、より積極的な意味の地方文化というものをつくるべき時代にきているのではないか。建前というのは、これは、それにならうということは格好がいい事ですし、無難な事です。だけれども、かなり疲労する事だと思います。そして、どんなにやってもうまくいかないものだと思います。

本音というのは、これは気楽にできる。しかし、そこには限りなく堕落してしまう危険がある。しかし、それにもかかわらず、本当の基本的なエネルギーは、私達の人生をつくっていくエネルギーの燃料にあたるものは本音の中にある。本音を建前という演技の中にどのような形で燃焼させ、どのような方向に運転していくか、そういう事の中に私達一人ひとりの教養、或いは日本の文化というものの能力というものが反映するのではないかと思います。

井上学長の挨拶
(講師紹介をかねて)

このたびは、本学のキリスト教文化研究所主催による、このような公開講座を開く事になりました。そして今日の講師は非常に有名な三浦朱門先生です。いろいろな方々から、是非この講演を聞かせて頂きたいと随分反響がありまして、この時間はもう入りきれないで後に立っていられる方があり、主催者側としては有難い事です。けれどもお来し下さった皆様には色々とご迷惑をかけている事を先ずもって深くお詫び申し上げます。

三浦朱門先生はあまりにも著名なお方ですから、私の方から事細やかに紹介させて頂く事は却って失礼かと存じます。一言だけ私の受けた個人的な事で誠に恐縮ですが、忘れる事が出来ない印象をご披露させて頂きたいと思います。

それは一昨年の五月、上京の際、霞ケ関の文部省の一番上の階で、三浦朱門先生にお会いいたしました。私はそういう高い場所に上る事が苦手で、どういう風に話したらよいかとエレベーターの中で心配し、胸をドキドキしながら行ったのですが、三浦先生は非常に温かく迎えて下さり、「折角来られたのだから文部省の食事をよかったら一緒に召し上がって下さい」と言われ、その食事がのどを通らないぐらい大きな感激でした。そして、そこから出て行ってからの事です、私自身学会の発表があったので、文部省の手前の靴磨きで靴を磨いて行こうと思って、靴磨きのおばさんの前に立ちましたところ、そのおばさんは「あなた、地方から来られましたか。どちらから」「大阪から」「どなたに会いに」「三浦朱門先生に」「ええ、そうですか三浦朱門先生にお会いになったの」「実は私たち、とても喜んでいるのですよ」とその靴磨きのおばさんの言葉です。「あんな立派な真面目なお方が文化庁の長官になって下さって、ほんとうに日本は素晴しい国ですね」と靴磨きのおばさんと暫らく対話している時、私はアメリカの有名なエマソンの言葉を思い浮かべました。「一国を代表するような素晴しいリーダーと一般庶民との間はミスティカル・リーレイション、神秘的なきずなのようなものがなければならない。本当に偉い人というのは雲の上だけでなくて、一般庶民との間に、不思議な、神秘的な一致を持っている」という言葉が思い出されて来たのです。三浦朱門先生はまさに、そのエピソードからわかって頂けるように多くの人々の魂にふれた素晴しい日本のカトリックの代表的な作家であらせられます。こういう立派な三浦朱門先生を私たちのささやかな大学にお招きできた事は、私たちにとって大変大きな光栄であります。沢山の方々に集まって頂きまして有難うございます。それでは三浦朱門先生、よろしくお願い申し上げます。

キリスト教文化研究所長
岸教授よりのお礼の言葉

三浦先生、今日は本当に有難うございました。今日のこの演題を前から同っていまして、どういう話だろうかと実は考えておりましたが、今日のお話は、先生の西洋文化論、日本文化論、比較文化論といったようなもので、これからの日本の、そして日本人の生き方を「ホンネとタテマエ」という視点からとらえてお話して頂きまして、非常に深い感銘を皆様と共に受けました。先生はだいぶん前から本学にご厚意をお持ち下さいまして、一度講演に行ってあげようというふうな事でありまして、今日それが実現した訳でございます。この私共の大学に対するご厚意は、たてまえではなくて、ほんねだろうと思います。

ご来聴の皆様、今日は私共のキリスト教文化研究所主催という事で特別講演会を開かせて頂きましたところ、こんなに沢山の方がお出で下さって、入りきれなくて大変申し訳ない事でした。この次は広い講堂を使いまして、もっと大勢の方に快適にお話をお聞き頂くようにしたいと思っています。長時間、ご聴講下さった皆様に感謝申し上げます。有難うございました。

〔あとがき〕

本学は、キリスト教文化研究所の主催により、例年公開講座や特別講演会を開催し一般に開放している。本年度は去る五月二十一日、作家三浦朱門先生をお招きし「ホンネとタテマエ」と題し講演を賜わり、満席の聴衆に感銘を与えた。

今回、先生のお許しを得て、これを特集号として集録させて頂いた。先生に心から感謝申し上げる。なお文中の小見出しは広報室でつけたものであり、また文責はもとより広報室にある事をおことわりしておく。